

他地域と比較して浮かぶ石川県の民間薬と民間療法の特色調査

(代表) 有賀友香 (医薬保健学域薬学類・創薬科学類 2年)

荻谷元規 (医薬保健学域薬学類 3年)

島田拓弥 (医薬保健学域薬学類 3年)

花岡裕弥 (医薬保健学域薬学類 3年)

岡田泰彦 (医薬保健学域薬学類・創薬科学類 2年)

澁谷俊紀 (医薬保健学域薬学類・創薬科学類 2年)

酒谷尋 (医薬保健学域薬学類・創薬科学類 1年)

鈴木愛理 (医薬保健学域薬学類・創薬科学類 1年)

瀧澤祐美佳 (医薬保健学域薬学類・創薬科学類 1年)

指導教員

御影雅幸 (医薬保健研究域薬学系教授)

研究概要

1. 背景と研究目的

薬は、古来経験則でその効果を認知され広がった。土地の風土や気候により用いられてきた薬に特色があり、外界からの影響がない限りその周辺地域の原材料を用いて病を治す必要があった。やがて地域間で交易が盛んになると、日本国内全体で類似した薬が用いられるようになったり、別の地域から原料となる植物を取り寄せて用いるようになったり、あるいは代替品や勘違いから別の植物が薬として用いられたりするようになった。

日本で使用されてきた薬は生薬、漢方薬、民間薬に分けられる。生薬は自然界に存在する植物、動物、鉱物などの天然品をそのまま、あるいは乾燥、水蒸気蒸留などの簡単な加工を施して薬品としたものをいう。また漢方薬とは漢方理論に従って生薬を複数用いて調製した薬である。一方で、民間薬とは近代的な医療と異なり、一般の民衆の生活の中で発祥し伝承される知識に基づいて、一般の人々が各地で独自の治療を行うために使用する薬物を指す。民間薬の中には理論的な証拠に乏しく薬理学的に明らかにされていないものも多い。しかしながら、民衆の中で繰り返し使用されてきた歴史を持つものが結果として残っており、根強く一般民衆に浸透していることを考えると、科学的に明らかにされていないという理由のみで排除するのは適当ではない。本研究では石川県とその他の地域に伝わる民間薬について内容をまとめ継承することを目的に調査を行った。

2. 研究方法

石川県の他に『四大売薬』と呼ばれた富山県(富山)、滋賀県(近江)、奈良県(大和)、佐賀県(田代)について文献調査と現地調査を行った。文献調査では石川県では『加賀藩の秘薬』(昭和42年)や『日本の伝承薬 江戸売薬から家庭薬まで』(2005年)等を用いた。また、現地調査では各地域の薬資料館や薬草園、薬局店舗などを訪問し、民間薬の歴史や特色などを聞き取り調査した。

3. 研究成果と考察

売薬産業と民間薬

- 江戸時代初期に巨大な売薬産業が誕生したことで庶民にも簡単に薬が得られるようになった。それによりこれまで用いられてきた民間薬から売薬産業が提供する家庭薬へと民衆が用いる薬が変更したと考えられる。

〈考察〉 民間薬は家庭薬として古くから周辺地域の植物などを用いて作られてきた。しかし江戸時代、安定した社会になり交通網の発達や貨幣経済の充実により、一般庶民も他の地域に出かけたり物を購入したりすることが簡単になった。そしてほぼ同時期に売薬産業が発達したことにより家庭薬の進出が大きく広まり、逆にこれまで用いられてきた民間薬は使用頻度が減少したと考えられる。

加賀藩の本草学

- 石川県の薬草

石川県産の特徴的な薬草に黄連（キクバオウレン）が存在する。石川県産の黄連は加賀黄連と呼ばれ国内で生産される黄連のうち最上品とされた。薬用部位は根茎で民間薬的には煎じ薬として健胃、殺菌、止瀉薬として用いられた。

〈考察〉 延喜式（平安時代）によれば加賀国から黄連、枳殻、芍薬、茯苓、藍漆、干地黄、署預の七種の薬草が納められたと記録されている。このうち特に黄連は他地域の者よりも色や香りが強い等の理由で最上品とされ加賀国の名産品だった。現在でも石川県内の日蔭多い山間部に入ればキクバオウレンを見つけることができる。そのため民間薬として多く用いられたと考えられる。

- 石川県（加賀及び能登）の薬事産業

加賀藩五代藩主、前田綱紀による本草学の研究が推し進められ、新たに医療制度が整えられた。また、新薬の開発なども推し進められた。これにより加賀藩の医療技術が大きく発展した。

〈考察〉 江戸時代、『本草綱目』（明代）が漢方の絶対権威とされ、研究対象となっていた。この書籍は日本の薬学の基底となすもので、始まりは中国で世界最古の漢薬書である『神農本草経』（紀元 500 年頃）（漢代）をもとに発展した。なお、神農とは中国における薬の神様を意味する。『本草綱目』は李時珍によりまとめ上げられ、後に日本に伝わったものである。前田綱紀は本草学者を加賀藩に招き、研究させ、本草学、つまり薬学に関する書籍を多く執筆させた。これにより加賀藩における薬学は大きく発展することになった。特に招かれた本草学者の一人である稲生若水は加賀藩の本草学の基礎を築いたと言われ、加賀藩内での和薬の探索、薬用植物の調査、栽培、治療薬の調整を行った。さらにこの時代、綱紀は様々な薬方を金沢に集めた。これは研究目的もあるが庶民のための治療目的もあり、医療状態の改善のためこれまで門外不出とされていた藩の秘薬を公開し、庶民がこの薬による治療を受けられるようになった。さらに良薬の流通を良くするため薬店舗の設置も数件行った。以上のように加賀藩内の薬の質は高められていった。当時加賀藩では自然科学、国学漢学等の文科両面力を入れ、「政治は一に加賀、二に土佐」という言葉もあったと言われている。さらに藩首自体も薬学に傾倒し日本や中国の

書籍では飽き足らず、オランダの薬用植物所も求めた。このような事実から加賀藩の本草学、薬学が研究方面において大きく発展し、庶民が受けられる医療も大幅に改善されたことが推察される。

- 石川県発祥の薬

紫雪（しせつ）、耆婆万病円（きばまんびょうえん）、烏犀円（うさいえん）が加賀藩の薬の特色を多く含んだ薬として加賀三味薬と呼ばれる。

〈考察〉 加賀藩では研究によって得られた知識や資料をもとに多くの新薬も開発した。薬の作成者も研究者だけではなく薬店舗の経営者や医者なども行った。加賀発祥の薬で特徴的な物百種が加賀藩秘方としてまとめられており、そのうち特に三種が加賀三味薬と呼ばれる。特に紫雪は名高く、原材料に金や辰砂、磁石、犀角など希少価値の高い物を多く用いている。耆婆万病円は三十一種、烏犀円は五十種以上の原材料を用いて作られる。薬店舗によって調剤が僅かに異なっていたと言われているが、いずれにしても特徴的な生薬を数多く用いている。このことからこれらの薬の開発、作成に大きな労力、知識を必要としたことが分かる。そして作成者の職業の数も多いことから研究や知識の交流も同業者間だけではなく、非常に広がったのではないかと推察される。

他売薬の発展

- 富山県（富山）の薬事産業

立山をはじめ多くの山麓があり、民間薬の薬草はこれらの山から得られたと考えられる。しかし越中富山の薬売りによって売られた漢方薬に用いられた生薬は六神丸をはじめ富山産でないものが多い。特色ある薬物として附子や熊胆等が有名。

〈考察〉 富山藩は特色ある地域で、立山、五箇山と山に非常に恵まれた土地である。特に立山は特色が多く、火山であり氷河もある。しかし富山藩が置かれた際、この土地は恵まれた土地とは言い難く、治水政策や火山噴火の備えなど、後々までも対策を必要とした。このような背景もあり、当時の富山藩は財政難に悩まされた。そのため売薬産業をはじめとする商業での立て直しを余儀なくされた。富山藩が売薬産業を発展させる強みとして立山信仰があった。当時信仰による力は非常に大きく、薬の靈験、効能を知らしめるツールだった。これは立山信仰に限らず様々な薬がそれぞれの土地にゆかりのある信仰と結びつけられている。立山は富士山、白山とともに日本三霊山の一つである。さらに地理的には、陸海ともに交通の便が発達していたことも行商人にとって恵まれた点だった。富山藩は、日本海沿いの北陸街道と山越えの飛騨街道との結節点に位置する交通の要衝にあった。さらに海上交通は、北前船（きたまえぶね）と呼ばれる和式大型帆船による日本海航路の発達により、北は北海道から南は鹿児島まで航行が可能となっていた。藩が行った具体的な政策には「先用後利」、「他領商売勝手」がある。これらは他藩の売薬産業の手本となった。前者は置き薬のシステムで先に様々な種類の薬を渡し置き、一年後行商人が再び訪れた際使った分だけ料金を受け取り、新たな薬を置き薬として交換するというものである。そして他領商売勝手とは、当時土地に領民を縛り付けることが望ましいとされた封建時代に他藩に赴き商売を行うことを推奨する政策である。当時この政策は非常に画期的なもので、早期にこれを決断したことが規模の拡大につながったと思われる。以

上のように富山売薬は各地域の消費者と信頼関係を構築しつつ巨大な売薬産業を作ることに成功した。

富山で採取される薬物として有名なものに附子や熊胆がある。附子はトリカブトの塊根で鎮痛、強心作用がある。立山など山麓に生える。しかし毒性が強く民間薬として利用されたとは考えづらい。一方熊胆はクマの胆のうでこれをとることで消化促進作用があるとして民間薬に用いられた。しかしクマはワシントン条約により保護されているため現在では偽物も多く出回っている。手に入れるには現在では薬として購入する必要がある。このように現地の特色ある薬草などはなかなか用いることはできない。しかし現在富山県自体が他地域と比較して「薬の土地」としての意識が強い。そのため発祥の土地こそ不明だが葛湯や南天の実等を用いた民間薬についての資料が多い、という特色がある。また、薬膳料理の食堂も多い。葛や南天、ドクダミやヨモギ等、全国的に分布している植物を最もよく民間薬として現在も利用している土地の様に思われる。

富山売薬で用いられている生薬のうち多くが地元産ではなく、中国（清）からの輸入品を用いていた。長崎の出島で輸入された生薬をよく吟味し、品質管理は徹底されていた。これは麝香など富山県では手に入らないものを扱うことが多かったことや中国からのブランド、という意識があったとも思われる。

● 滋賀県（近江）の薬事産業

地形、土質的な要因で薬草に恵まれた伊吹山をもとに発達した。薬草の種類も多く民間薬としての利用も発達しやすい地域だった。

〈考察〉 伊吹山は薬草に非常に恵まれ、「薬草の宝庫」とも呼ばれる。これは伊吹山の地形に関係がある。伊吹山は滋賀県と岐阜県の県境に存在する山で、関ヶ原付近の南側では標高が一気に低くなるのに対し、北側は白山まで続き石川県や福井県の県境の方まで続いている。これにより白山から日本海側の植物が伝わり、関ヶ原付近の標高が低い土地で停滞する。さらに南側の植物も当然その地域に存在する。これにより他の地域よりも多くの種類の植物がこの地域に存在することになる。実際植物は千三百種が知られている。さらに土質が石灰岩性のため高木層発達が悪く、低木層、草本植物層が有利になることも植物の多様性の要因である。この特色のため過去には織田信長により薬草園が開かれたこともある。さらに滋賀県で最も古い薬に関する文献は668年に蒲生野で行われた「くすりがり」の記録で「あかねさす 紫野ゆき しめ野ゆき 野守は見ずや 君が袖ふる」の歌が詠まれたのはこの時であると言われている。滋賀県自体薬草が豊富のため民間薬利用も多い。特に有名な民間薬としては伊吹モグサ等が挙げられる。さらに入浴剤や煎じ薬などに様々な薬草が用いられ、その数は200種類以上だという。滋賀県は古来より奈良、京都とも近かったため、売薬産業が発展するにはこの点も有利だったと考えられる。

さらに滋賀県、甲賀は忍者でも有名だった。忍者は常備薬等のために自ら薬草の栽培や生薬の作成を行った。さらに旅先で生計を立てるために加持祈祷やお札とともに薬を売って歩く場合もあった。当然薬学関連に高い知識を持ち、それが江戸時代、近江売薬が発達する要因となったと考えられる。

● 奈良県（大和）の薬事産業

かつての都だったため、医療制度には恵まれやすかった。ただし江戸時代では幕領、旗本領と土地の所有者が入り混じってしまったことや藩からの保護が得られなかったため発達には少々時間がかかった。

〈考察〉 奈良は都であったこともあり、古くから医療制度には恵まれた土地だった。例えば、推古天皇の時代から庶民向けの医療施設が建設されたり薬草園を作ったりと他の地域と比較すると民衆はより良い医療を受けやすかった。しかし奈良売薬は富山売薬よりも本格的な売薬業の開始は少々遅れた。その上当初は富山売薬の様に藩の保護や業者同士の団結力も弱かったこと、土地柄上、幕府、旗本、寺領などが入り混じっていたことなどがやや不利な点があった。しかし元々創薬業にも歴史があり、都や大阪などの要となる地域が近く、かつ学者などにも恵まれたこと、後々有力な商人が現れたことにより徐々に力をつけ、最終的には富山売薬とほぼ同じ位の力を持つようになった。二つの巨大な売薬産業による衝突摩擦が当然ながら起きたが、「三光丸」の当主米田丈助が発起人となって越中富山の代表に声をかけ、共存共栄を図った。これにより江戸時代、売薬産業が大きく発達できるようになった。奈良売薬の有名薬には「陀羅尼助」などがある。また、民間薬として用いられた植物には大和当帰がある。

- 佐賀県（田代）の薬事産業

朝鮮半島の影響を特異的を受けた薬が目立つ。他売薬と異なり発展もやや遅かったが、朝鮮半島に近いことや交易の要となる土地であったこと、他売薬の中心地から比較的離れていたことなど立地的に優位な点が売薬産業発展に大きく寄与したと考えられる。

〈考察〉 発展の裏付けとなる明確な資料は残っていない。しかし豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に対馬藩の武士が漢方を学び、薬種を持ちかえって売薬を始めた、貴重だった朝鮮人参が対馬藩のみ朝鮮との交易が許されていたため手に入りやすかった、などが考えられている。田代は筑前、肥前、筑後の三ヶ国間に存在し、交易に有利な土地であった。さらに近世では江戸と長崎間の街道が整備されたためますますその重要性を増した。このことがまず有利に働いたのではと考えられる。さらにこの地域まで富山売薬が来ることも多く、ここで製薬の情報が伝わった、とも考えられる。特色としては全国的に「奇応丸」と呼ばれる薬が存在したが、「朝鮮名法」と冠称をつけた「朝鮮名法奇応丸」は田代売薬のみでそのブランド性を強調した。

他地域と比較して浮かぶ加賀藩の特色

- 加賀藩と富山売薬の比較

加賀藩は研究に、富山藩は売薬産業に重きを置いてきた。そのため用いる薬の原材料についても考え方が異なった。加賀藩では国産の薬草の探索や中国の薬草の代替品探査などを推奨したが、富山藩は中国からの輸入品を積極的に用いた。また、他地域に大きな影響を与えた富山売薬だが、訪れた行商人の数を比較すると加賀藩は隣接する地域の中では少ない。これは加賀藩内で医療制度が発達していたためと考えられる。

〈考察〉 加賀藩では薬については研究に重点を置き、和薬の探索や新薬の開発などを積極的に行った。また、加賀藩内だけでも薬屋が数多くあり、加賀藩の秘薬が民間にも開放された後、これらの店で購入することができるようになった。このことから、加賀藩内では医療の発展が進み民衆はその恩恵を十分に得ることができたと考えられる。一方富山売薬では財政の立て直

しのため売薬産業に力を入れた。そして「他領商売勝手」に見られるように多くの地域に進出した。これにより加賀藩にも富山の薬が流入するようになった。しかし隣接する他の地域と比べると加賀藩に入った富山の行商人の数は少ない傾向を示す。当時加賀藩が富山の行商人の数を規制していたという文献はなく、かつ富山藩は本来同じ加賀藩の前田家から分かれて生まれた藩のため決して両藩の仲が悪かったという事実もない。街道が整備され他藩と比べ財も多かった加賀藩に行商人があまり向かわなかったという事実は当時の加賀藩の医療が富山の薬を用いる必要がなかったためと考えられる。民間にも加賀藩内の薬が十分に浸透し、かつ最前線のものが得られたと思われる。

また、加賀藩と富山藩では用いる生薬についての考え方にも相違点が見られる。加賀藩では和薬の探索を行うなど、国内産の生薬にも目を向けてきた。しかし富山藩では中国産を積極的に用いた。また各藩内で開発された漢方薬の材料を見ると加賀藩内では金や辰砂、磁石等が富山藩では熊胆や附子、麝香等が特徴的である。加賀藩内では希少な鉱物性の材料を用いる傾向があり富山藩では動物性生薬を用いる傾向が強い。そして加賀藩で用いられる薬は用量を間違えれば危険性も高い。これは加賀藩が薬を生産するうえで富山藩ほど大量生産をする必要がなかったことや当時の加賀藩内の研究をもとに新薬を作成したことが影響したと考えられる。

4. 結論

- 石川県に用いられてきた民間薬には黄連があり、古来加賀黄連として珍重された。民間薬として有名な物に滋賀県の伊吹モグサ、奈良県の大和当帰がある。
- 江戸時代に発展した売薬産業や交通網の発達、貨幣経済の確立により一般民衆が簡単に薬を購入できるようになった。それにより用いられる薬は民間薬に代わり置き薬の家庭薬が一般的になった。
- 加賀藩では新薬の開発や和薬の探査などが行われ、研究に積極的だった。また民間に秘薬を公開するなど庶民が得られた医療行為も質の高いものだったと予想できる。
- 江戸時代に様々な地域で売薬産業が発展し、それぞれ様々な特色を持っていた。富山売薬が最大規模で加賀藩にも薬が流入した。しかし隣接していたことを考慮すればその影響は小さく、その理由として加賀藩内で医療が十分に発達していたことが挙げられる。
- 民間薬の使用が少なくなった理由には江戸時代の家庭薬の普及が原因と考えられる。民間薬の継承には科学的に再評価し有効性を示す必要がある。

参考文献

- ・御影雅幸、木村正幸「伝統医薬学・生薬学」南江堂 2009年
- ・三浦孝次「加賀藩の秘薬」石川県薬剤師協会 昭和42年
- ・鈴木昶「日本の伝承薬—江戸売薬から家庭薬まで—」株式会社薬事日報社 2005年
- ・さいたま民族文化研究所「田代の売薬習俗」文化庁文化財部伝統文化課 2011年
- ・中富記念くすり博物館「中富記念くすり博物館 展示案内」中富記念くすり博物館 1999年
- ・宗多一「日本の名薬」八坂書房 1993年
- ・京都薬科大学「伊吹山の薬用植物」滋賀県厚生部薬務課 1971年